

空手道詳説（24）

第2章 沖縄史の概説

4 沖縄史の概略（その5. 薩摩藩の琉球侵略）

（3）沖縄本島における戦い

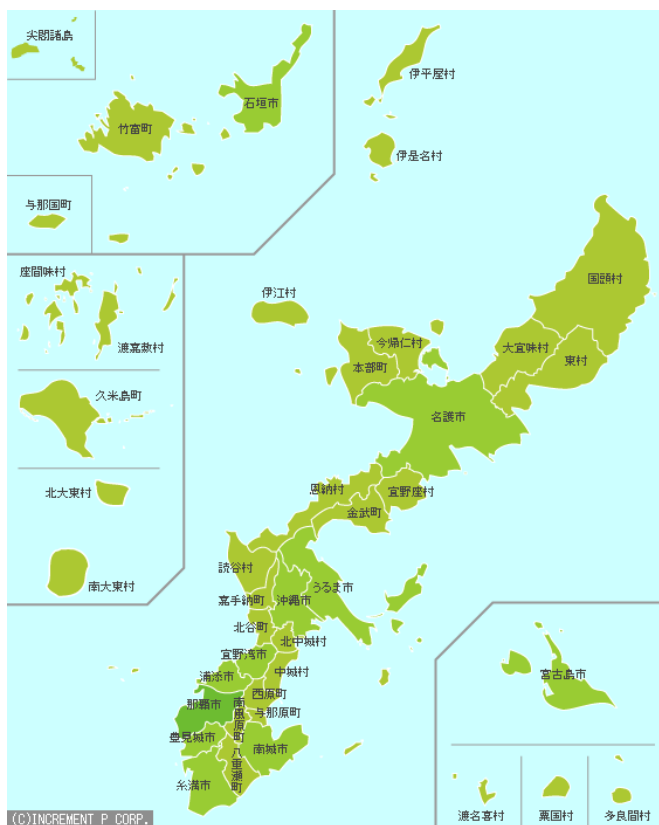
① 本島到着

1606年（慶長11年）3月24日（太陰暦）、午前中に沖永良部島を出航した薩摩藩の軍船団は、翌25日夕暮時に沖縄本島北部の今帰仁（なきじん）運天港に到着した。

右に沖縄県の行政区分図を掲載したので、図面を見ながらお読み頂きたい。

今帰仁村に向かい合うのが屋我地島（名護市）で、その間の狭い海路の今帰仁側が運天港である。

兵たちは、翌日上陸して今帰仁城を進攻するが、城の将兵は薩摩軍が向かう前、既に落ち延びたと見え無人であった。薩摩兵は方々に放火して回った。



② 尚寧王の和睦の試み

薩摩軍の今帰仁入りを知るや、尚寧王は和睦の使者として首里円覚寺の菊隠宗意（生年不詳～1620年）に要請した。菊隠は首里円覚寺で出家し、後には京都の大徳寺（臨

濟宗)で長く修業、帰国後は首里円覚寺第18代住持(住職)を務めるが、この時は隠居し別庵に住んでいた。

菊隠が選ばれた理由として、日本語が達者なことと、薩摩藩に使者としての渡航歴も多く、歴代の島津家当主とも親交が深かったせいと言われている。

菊隠は、高齢を理由に一度は辞退するが、再度の要請に対し王国の国難ともいえる一大事であり、国恩に報じなければという気持ちから受諾した。

菊隠の他に、三司官の名護良豊(1551~1617年)、和泉(大阪府)堺生れで琉球に渡り茶人として仕えていた喜安(1566~1653年、千利休の孫弟子)の二人が随行として選ばれた。

菊隠たちは、3月26日朝陸路を出立し、昼頃には今帰仁の近くまで進むが、その先は薩摩軍で満ちあふれ通れないと聞くや、漁師に船を出させて進み、翌日になって薩摩軍の船と出会って乗船し、ようやく運天港に到着した。

船上において、菊隠は島津家武将の肝付兼篤(きみつきかねあつ)と対面し、『どうか合戦を止めてもらいたい。今後の進退などは、望まれるとおりに従います』と述べた。

肝付は、これを聞いて承諾した後『那覇で和睦の談合を行う』と決まり、名護良豊を人質として運天港に残すことになった。

29日早朝、菊隠と供の者たちは薩摩船に乗って出航し、夜半になって浦添の牧港に着き、夜を徹し徒歩で首里城を目指し、報告を済ませた後は那覇に下がって待機した。

運天における和睦の申し入れを聞いた総大将の樺山久高は、軍団を那覇港に集結させるつもりであった。ところが、那覇港には鉄の鎖が張り巡らせているとの情報があったため、30日数人を船で那覇港に向かわせ、残る総勢を陸に揚げ、首里城を目指して行軍を開始した。

那覇港に張られた鉄の鎖とは、港の両岸に砲台を据え付け、港に軍船が入れないよう両砲台間に鉄の鎖を張り渡していた。

③ 琉球国と薩摩軍の戦闘能力

第二尚氏第3代王の尚真(在位:1477~1527年)は、中央集権制を確立しており、それ以降の王国の軍備として、直轄軍と各地の間切軍(地方領主の軍)、島々の軍を合わせ約1万の兵を有していた。薩摩藩の侵攻を受けて首里と那覇に配置した軍兵は、薩摩軍を上回る4000名で、城と港に待機していた。

しかし、群雄割拠が相争う戦国時代、その死闘をくぐり抜けてきた薩摩軍3000人の精鋭は、鉄砲を主とする最新鋭の軍備と実戦力で勝り、人数だけで論ずる訳にいかない大きな戦闘力の差を誇示していた。

④ 首里城の攻防

4月1日午後2時、物見の薩摩軍船が那覇港に突入すると、両砲台から集中砲火を浴びせられたので沖合に後退した。

一方、陸路の薩摩軍本隊は、次々と村々を攻撃して抵抗者を排除し、尚寧王の出身地である浦添グスク（城）を焼き払い、しかも由緒ある寺院まで焼失させて進撃したのであった。

薩摩軍が首里に接近すると、首里城守備隊の兵士ばかりでなく、龍福寺宗徒たちも加わり激しく抵抗したので、薩摩軍は雨霰のように砲撃を加えると、守備隊は暫く抵抗した後、戦意を喪失し首里城に逃げ込んで終わった。

樺山は、軍律として『和睦を成すためには、狼藉あるべからず』と下知していたが、勢い余った兵たちには統制の及ばないところ多かつたようである。

薩摩藩の記録には、首里城に近づいたところ激しく抵抗に遭い、仕方なく砲撃したり焼き払ったりしたのだと残されている。

島津氏側からすれば、十分目的が達成されたといってもいい戦果であったが、首里、那覇への激しい攻略は、講和の交渉をより有利に進める意図があったと推測される。加えて、将兵には武功ということも念頭にあったかもしれない。

首里城が占拠され身動きとれなくなった王府側は、降伏の申し出きり仕方がなかった。決着ついた薩摩の全軍は、大方が那覇港に集結して停泊した。

⑤ 和睦の成立

4月2日早々から開始された和睦（講和）の席には、薩摩側は大慈寺龍雲（前年9月、尚寧王に対し家康に恭順するよう諭した高僧）を筆頭に3名、琉球側は摂政で王弟の具志上王子、菊隠の他三司官など6名であった。

結局のところ、具志上王子と三司官が人質になることで一先ず決着。4日には尚寧王が城を下がり名護親方の屋敷に移ると、5日から宝物の目録作りが開始された。

16日には尚寧王と薩摩の総大将樺山久高、副大将平田増宗が、那覇の泊にある崇元寺で対面している。崇元寺は1527年に創建された臨済宗の寺で、尚氏王統の霊を祭る寺だったが、先の太平洋戦争で焼失してしまい、現在は公園となっている。



戦禍で焼失前の崇元寺



今に残る三連アーチ型の石門（重要文化財）

⑥ 和睦その後

侵攻（征伐とも）後の和睦や講和といっても、諸詮は琉球国の大敗に終わったため、無条件降伏に等しかった。

島津氏の薩摩藩は所期の目的を 100%達成し、琉球国は以後島津氏の言いなりにならざるを得ない運命を背負い、徳川の世を約 270 年にわたり苦難の歳月を歩むことになり、270 年後の明治維新後は、後述する「琉球処分」という一方的な措置に至るのである。

この戦役で、双方ともに多大な損害を被ったのは言うまでもない。薩摩藩側は 200 人近い戦死者、琉球側は兵以外の住民も含め薩摩側を数倍上回ったと思われるが、正確な数の記録はない。他にも、船舶や人家財産などの被害は数知れず、このように大きな犠牲のもと、琉球国は明（中国）の冊封体制とともに、薩摩の属領として幕藩体制の中に組み込まれるという、独立国の体裁を保ちながら、特異ともいえる国体をもって歩む悲運を背負わされたのであった。

更に、和睦会議の最中でさえ、統制の行き届かない薩摩兵たちの乱行は、放火や略奪となって人民の不安を募らせたという。

(つづく)

参考文献等（発行年月は著書に記載のまま）

- ・ 宮城栄昌著「沖縄の歴史」、昭和 43 年 11 月 26 日初版、日本放送出版協会発行
- ・ 新里恵二著「沖縄史を語る」、1970 年 9 月 1 日初版、(株)勁草書房発行
- ・ 池田奉秀著「古流現代空手道集義第一巻」、昭和 50 年 7 月 25 日初版、日本空手道常心門出版部発行
- ・ 喜納大作、上里隆史共著「琉球王国のすべて」、2012 年 6 月 20 日初版、(株)河出書房新社発行
- ・ 上里隆史著「オモシロ琉球・沖縄史」2011 年 6 月 25 日初版、(株)角川学芸出版発行
- ・ 外間守善著「沖縄の歴史と文化」1686 年 4 月 25 日初版、(株)中央公論新社発行
- ・ 比嘉朝進著「歴史・伝説にみる沖縄女性」2005 年 12 月初版、那覇出版社
- ・ 「空手道・保存版」、執筆者・大塚博紀他 31 名、昭和 52 年 3 月初版発行、株式会社創造
- ・ 山里永吉著「首里城内の女たち」昭和 47 年 4 月 20 日初版、閣文社発行